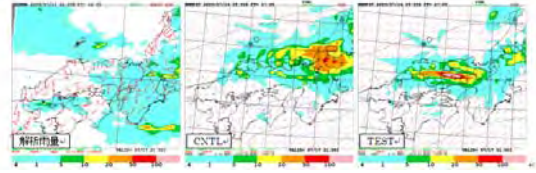
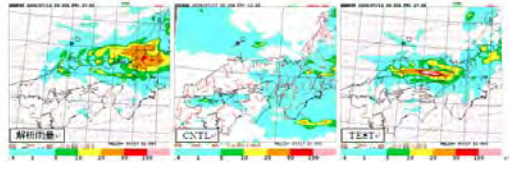


平成 22 年度数値予報研修テキスト正誤表

最終更新日：2011 年 3 月 10 日

該当箇所	正	誤
p.15 右段 3 行目	空間スケール 80km では、予報初期において LFM は改悪である。空間スケールをさらに拡大し 320km の場合は、予報初期において LFM は改悪であるが予報後半では LFM と MSM に有意な差は無い。閾値 10mm/h の場合は、空間スケール 320km 以下において、LFM の改善は予報初期を除き有意である。	同様に、空間スケール 80km では、FT=7 を除き LFM は改悪である。空間スケールをさらに拡大し 320km の場合は、予報後半では LFM と MSM に有意な差は無い。閾値 10mm/h の場合は、空間スケール 0km において LFM と MSM に有意な差は無い。しかし、空間スケール 80km 以上において、LFM の改善は予報初期を除き有意である。
p.15 右段 18 行目	図1.2.18(b)によると空間スケール0kmの場合、予報初期においてLFMはMSMよりも劣る。空間スケール80kmにおいてLFMは、FT=2まではMSMよりも劣り、FT=3以降はMSMと同等である。空間スケール320kmでは、LFMとMSMが同等である。	図1.2.18(b)によると空間スケール0kmの場合、FT=9を除きLFMはMSMよりも劣る。空間スケール80kmにおいてLFMは、FT=4まではMSMよりも劣り、FT=5以降はMSMと同等である。空間スケール320kmでは、FT=1を除きLFMとMSMが同等である。
p.17 左段 44 行目	空間スケール 80km では FT=3 以降に同等であった。	空間スケール 80km では FT=6 以降に同等であった。
p.14-15 図 1.2.15- 図 1.2.18	後述の通り	
p.31 左段 10 行目	表 2.1.1	図 2.1.1
p.32 表 2.2.2 ECMWF の現システムの水平解像度	約 80km	約 50km
p.36 右段 9 行目	図 2.3.8	図 2.3.9
p.55 図 2.7.3		 「解析雨量」と CNTL の図が逆になっている
p.63 左段 33 行目	GSM1011	GSM1009
p.63 右段最後の行	確認できる	確認でき

p.85 左段 24 行目	日照率が 50%以上を「晴れ」、	日照率が 50%以下を「晴れ」、
p.86 図 3.3.10, 図 3.3.11 のグラフの縦軸	50%適中率	50%適中率 (%)
p.90 右段 9 行目	九州、近畿中国四国。沖縄の順である。	近畿中国四国、九州、沖縄の順である。
p.91 左段 31 行目	付録 A.2.9	付録 A.2.8
p.91-93 図番号	図 3.4.8～図 3.4.14	図 3.4.1～図 3.4.7
p.126 表 16 段目	500hPa の気温場の	500hPa の高度場の
p.130 上の表 6 段目	GSM : FT=9 から FT=81 まで 6 時間間隔	GSM : FT=9 から FT=84 まで 6 時間間隔

<訂正>p.14-15 図 1.2.15-図 1.2.18 について統計期間が6月7月8月の3か月間に足りておりませんでした。下記の通り、統計期間を3か月取って計算した図に差し替えます。

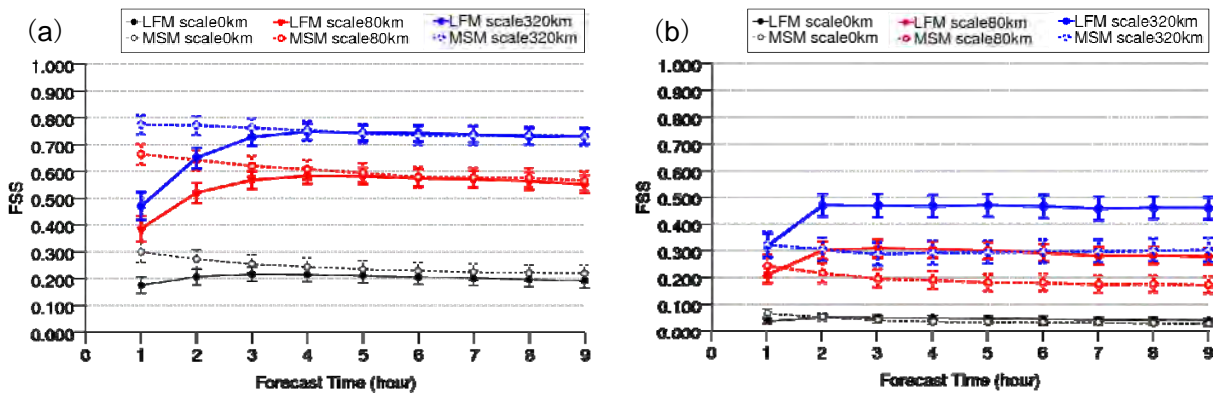


図 1.2.15 2010年夏(6月、7月と8月)のFSSと予報時間の関係。(a) 閾値 1mm/h、(b) 閾値 10mm/h。FSSで比較するモデルは、LFM(実線)とMSM(破線)。空間スケールは、0km(黒色)、80km(赤色)と320km(青色)。エラーバーは、95%信頼区間を表す。

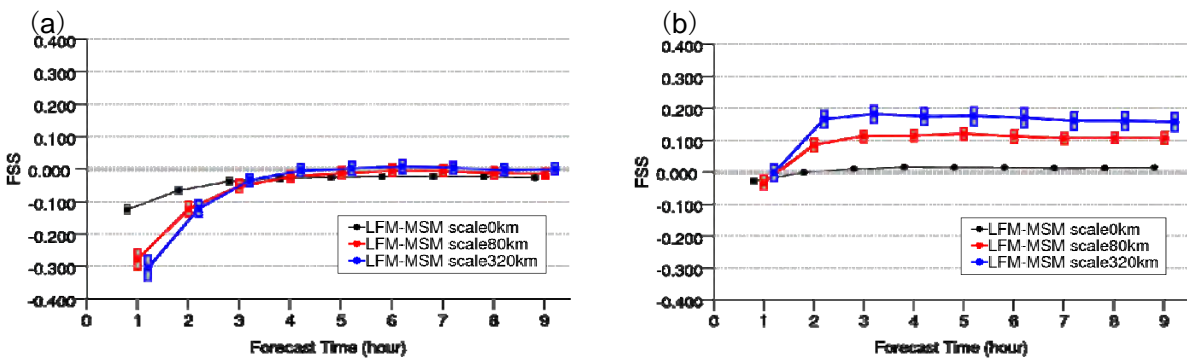


図 1.2.16 FSSの改善・改悪と予報時間の関係。実線はFSS(LFM)-FSS(MSM)。それ以外は図 1.2.15と同様。

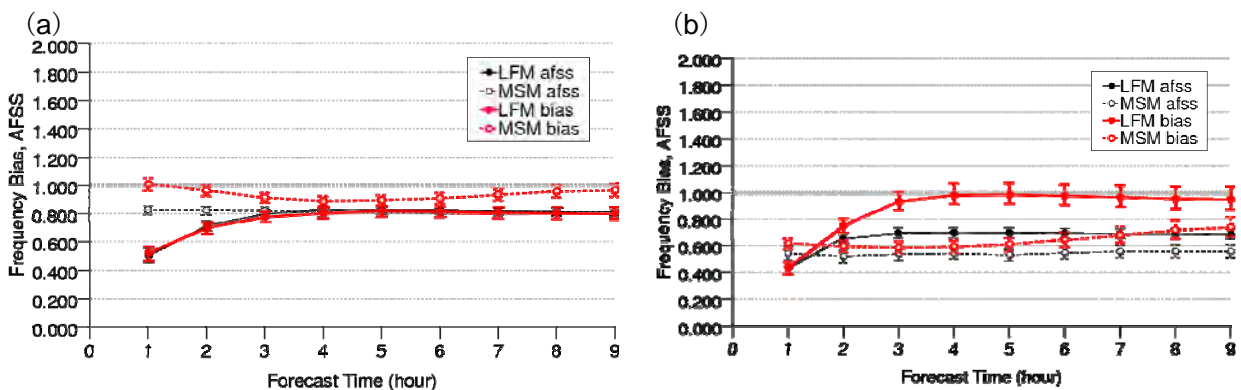


図 1.2.17 AFSS(黒色)・バイアスコア(赤色)と予報時間の関係。それ以外は図 1.2.15と同様。

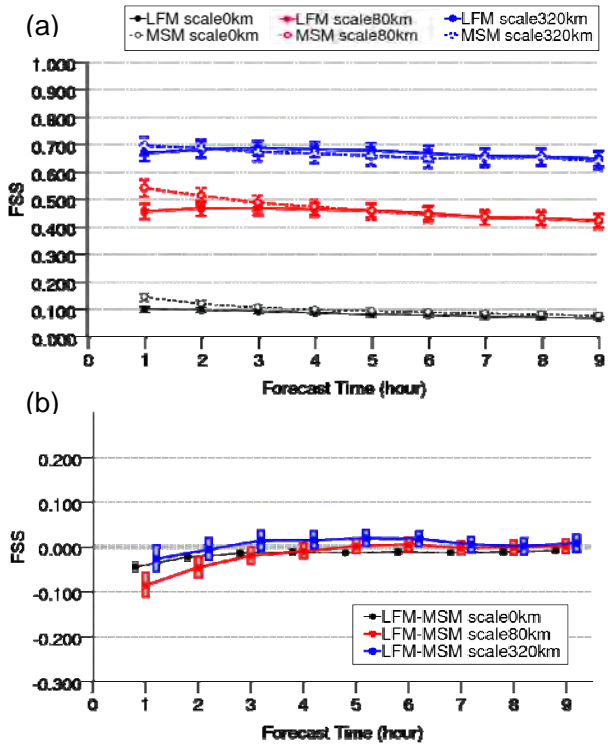


図 1.2.18 99thパーセンタイル閾値のFSSと予報時間との関係。(a)は図 1.2.15 と同様。(b)は図 1.2.16 と同様。